高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報　第 126 号
2023年　10月

第 189 回観察会　景場平自然観察会

8 月 6 日（日）に高山の原生林を守る会の自然観察会を開催しました。参加者は 10 名でした。

今回は猛暑を考慮し、当初のコースを見直し、景場平までを往復するコースをメインにしました。景場平は東吾妻登山コースの尾根までの途中にある湿原で、そこまではオオシラビソ林を通過します。湿原も併せて、登山前半の通過点で、足早に通り過ぎてしまうエリアです。

カニコウモリ

スカイラインからオオシラビソ林に足を踏み入れた瞬間から、真夏の空気は一変。なんとも心地良い冷涼な空気に包まれました。裸岩が多いダイナミックな登山道ですが、それ以上に登山道周辺のオオシラビソやダケカンバ、コメツガの古木が圧巻。古木や岩はコケ類のマットに覆われ、深淵な世界が広がっていました。その中でカニコウモリやツルアリドオシの白い花が開花盛り。陽射しの途絶えた薄暗い世界で白い個性的な姿が美しさを際立たせていました。

ダケカンバの樹皮に新しい森

このオオシラビソ林にはもう一つの森が存在しました。オオシラビソの倒木の根周りの土から始まった森、最初はセイタカスギゴケなどのコケマットです。コケマットが培地となりミネカエデやナナカマド、コメツガなどの幼木の森になっていました。もう一つはダケカンバの高木。その主幹分岐部にはコメツガの若木が定着しています。樹皮部にはコケマットが発達していてやはり、コメツガ、キタゴヨウマツ、ナナカマド、オオシラビソなどが芽生えており、独立した樹皮界の森が形成されていました。

景場平に出ると、それまでの暗がりの世界から一転して青空と白い雲の下にたおやかな東吾妻の山容が控える開放空間です。景場平では湿原植物のカヤツリグサ科の植物やコバノトンボソウとホソバノキソチドリの違いなどを観察しました。

第 189 回鳥子平、景場平（高原植物）観察会

丹治芳廣

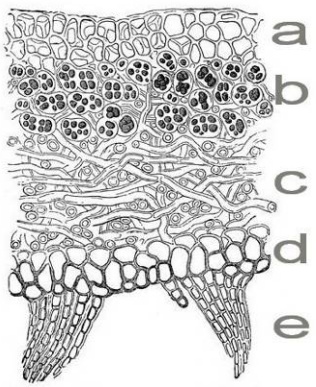
観察会への参加が、1 年 3 か月ぶりとなり、緊張感を持って四季の里駐車場に向かいました。駐車場では見慣れた方々に迎えられ、保険料の支払いと共に年会費も一緒に払い、会活動への参加に懐かしさを感じながらの観察会になりました。そのような感慨の中で、体調が回復期にあると聞いていた代表の姿を見ると、少しやせた感じではありましたが、話す口調は依然と全く変わらず、快調に言葉を繰り出す姿に安堵と安心を感じました。

観察会は、スカイラインにある景場平登山口付近の小さな駐車場に苦労しながら車を止め、始まりました。最初に興味を惹かれたのは、「ウマスギゴケの若者、働き盛り、老人？（外見はまるで違う植物に見える）が一堂に会する」との M さんの話でした。植物を稲や大豆のような作物しか直感的に想定できない私の頭脳にとっては、同じ場所に同時に、子供、働き盛り、老人があることに違和感があったのですが、よく考えてみると自然界においては、種、幼植物、大人の植物が同時に存在しているのが当たり前で、いかに自分が栽培植物を基準にしてものを見る癖（感覚）がついていると思ってしまいました。

次に興味を持ったのは、地衣類でした。いままでも、これが地衣類との話を聞く機会はあったのですが、「地衣類は菌類で藻類との共生的な関係性がある」との M さんの説明に、それって何だろう？との興味が湧きました。ネットで地衣類の情報を見ると、「菌類の構造の内部に藻類（光合成を行う微生物が多い）が共生している」とありました、地衣体横断模式図（ネット情報、細胞レベルの断面図で菌類の細胞の間に藻類の細胞が挟み込まれている）なる物をみて納得でした。（下図参照）

そこからネット検索を進めたら、菌、藻類、地衣類、コケ類、裸子植物、被子植物・・・と単語が出て来て、分かったような気になっていた言葉たちが、景場平に行く途中のオオシラビソ？の樹皮にあった地衣類を見たことから発展して、それぞれの生物の具体的な姿をイメージしながら再確認する行為は、知的好奇心を刺激するものでした。

もう一つ「樹皮界」の説明がありました。オオシラビソ？の老木地際部にコケが生え（M さんの説明ではセイタカスギゴケ等のコケマット）、そこに飛んできた種子が発芽して成長している姿がありました。土壌ではなくコケマットで発芽して成長するとは？養分はあるのか？水分は足りるのか？光は足りるのか？本当に厳しい条件と思われますが、適応した植物は成長を始めている。植物の逞しさであり、生存競争の厳しさに感服です。また、コケマット上の小さな植物世界に夢をみる感覚が残りました。



地衣体横断模式図
（典型的な異層状地衣類）
a:上皮層、b:藻類層、c:髄層、d:下皮層、e:偽根観察

このような観察会の時間は、私にとっては非日常の時間です。私にとっての日常は、「朝起きて、お袋を見て、寝起きの顔をチェックして、騒ぎながら服の交換をする。その後、洗濯と清掃が入って刻々と時間が過ぎていく」このような日常に、進入するのが非日常の体験です。観察会は、私にとって非日常の世界で、楽しくもちょっと緊張する時間です。淡々としながらも感情の起伏に突かれる日常生活にスパイス（刺激）を与えて、生活を維持するものとなっています。日常生活に喝を入れて楽しむため、今後ともお世話になります。

撮影会

高山を背に

湖沼で休憩

鳥子平にて

小鳥の森観察（秋）ホクリクムヨウランその後　松井さき子

夏の小鳥の森は、小鳥の鳴き声も蝉の声にかき消されてうるさいぐらいだったが、今日は微かな小鳥の鳴き声が聞こえてきて、静かな森をいつものメンバーで歩いた。

葉と実を赤くしたガマズミ、アザミに似たタムラソウ、オケラが咲き始め、谷間にはキバナアキギリが群生して咲いていた。

ホクリクムヨウランの花の咲いていた所に行くと、何も無くなっていて、皆でタヌキでも歩き荒らしていったのでは？と思った。他の場所に行くと、少し裂けている株があり蒴果が出き始めていて、皆で喜んだ。

春には数多くの株を見つけたが、花が咲いたのは十分の一、その後花が落ち蒴果になりそうなのがほんの一部で数本だった。ホクリクムヨウランは腐食植物、葉緑素を持たず有機物を吸収して育つとされていて、葉も根も無く本当に不思議な花ですね。花の咲く前に枝を見つけた時は、細い竹のようで黒色で不思議な感じがし、花芽らしきものを見たときも感動して興奮し、花が咲くのが待ち遠しかった。

去年の冬にムヨウランの蒴果を見つけて、是非花を見たいと願っていたので、念願がかない、色々と学習出来て良かったです。

マルバハギ

タムラソウ

ガマズミ

アオツヅラフジ

オケラ

霊山放射線量調査

霊山城跡にて

2023 年 10 月 7 日（土）に霊山の登山道沿いの放射線量調査をしました。2011 年から学習院大学と高山の原生林を守る会と共同で続けています。今回は、高山の会 7 名と学習院大 3 名合わせて 10 名が参加しました。線量測定に加えてキノコとヤマグリそして土壌を採取しました。放射性セシウム濃度を測定します。

いつものことですが、花や木々の観察を楽しみながらの調査です。今回は、センダイトウヒレンやオヤリハグマが例年より多く咲いていました。 放射線量は十分に下がっていますが、ヤマグリはほとんどが基準値を超えていることが昨年分かったので今年も心配なところです。空間線量率は 17 か所平均で 0.17 μSv/h で 2011 年の 9%まで下がっていました。しかし、ムラサキシメジやチチタケは生で 10000Bq/kg を超えていました。

西大巓ー西吾妻 近自然工法による登山道整備の現地調査

昨年の整備箇所を検証

2023年9月12日（火）に西大巓ー西吾妻間で環境省が主催する近自然工法による登山道整備の現地調査に参加してきました。今回の現地調査の目的は、昨年からの実施個所の現状確認、23 日（土）の整備作業実施個所の選択、新たな植生回復資材の試験設置です。参加者は裏磐梯自然保護官事務所、中里浩近自然工法アドバイザー、福島県自然保護課、アジア航測株式会社、多機能フィルター株式会社、安達太良自然センター、高山の原生林を守る会併せて 12 名でした。

藻類を張付けたネット試験

国立公園の登山道には法的な規制があり、それにかかわる行政機関も複数あります。加えてこのエリアは県と森林管理局の境界にあり法的規制にしたがった手続きが必要です。今回、その法定手続きでも前進の見通しがつき、その上、木道整備の様に業者に委託して終わりではなく、行政機関の職員も作業に参加して現場の状況を直接、確認していることは、従来にはない新たな登山道保全のスタイルです。そして、登山道整備の主体は登山者であることが近自然工法の核心といえるかもしれません。

植生回復の資源

今回のメンバーは大半が 20 代で予想以上の登りパワーでした。肺炎上がりの私は大きく後れを取る羽目に、それでも何とか、作業現場に間に合い、23 日の整備作業について検討をすることができました。また、今回はあの田中陽希さんの日本縦断登山番組の撮影スタッフを務めた安達太良自然センターの I さんも参加されました。

23 日は 3 班に分かれて 3 か所で整備作業をすることになりました。（佐藤　守　記）

西大巓-西吾妻　近自然工法による登山道整備作業

全員で西大巓直下の整備作業

2023 年 9 月 23 日（土）に西大巓から西吾妻小屋南西湿原までの登山道整備作業を行いました。参加者は、登山者（YAMAPer 含め 9 名）。中里浩近自然工法アドバイザー、裏磐梯自然保護官事務所、山形県、アジア航測株式会社（国立公園ステップアップ事業受託業者）、グランデコ職員併せて 24 名でした。

今回は、3 箇所で整備作業を行いました。新たに西大巓崩壊斜面と洗堀路手前に洗堀防止のための水切り個所を設営しました。

崩壊地帯の水切り作業

最初に西大巓の崩壊地帯の水切り、石積み、崩壊植生の根回り保護作業を全員で行い、その後、水場手前の洗堀個所、西吾妻小屋南西湿原の整備を行いました。特に西大巓崩壊斜面については水切り溝を比較的広範囲に設置しました。また、崩壊植生については根群がよく発達しているチングルマを中心に根巻き処理をしました。

殆どの参加者が初対面にもかかわらず、作業は順調に進み、心配された雨も降ることなく作業を終えることができました。

石積み作業

崩壊植生の根回り保護

今回は懸案の西大巓崩壊地帯核心部の登山道整備ができ、とても歩き易くなりました。蛇行する導線にしたのが功を奏したようです。通りかかった登山者から足元に違いを感じると声がかかりました。

取り組みは始まったばかりで、継続的な作業と効果の検証が必要です。（佐藤　守　記）

山のエッセイ 14

むか～し昔の、冬と夏の日のこと　長岡義人

青春の群像

校内において山岳部の部室は治外法権の場であると、部員たちは勝手に思っていた。教師も部室に足を踏み入れることはなかったし、当時の顧問は合宿は勿論のこと、練習を見に来るなんてこともなかった。まあ勝手にやってろと言うように野放し状態だったのだが、そんな部室にある日突然顧問の先生が現れた。そして部屋に入るなりいきなり「汚ったねぇな～、臭っせぇな～」と言って、部室中を眺めまわしてから、最後に正面の壁をじっと見つめていた。そこには先輩が書き残した落書きが、黒のマジックペンで大きく書かれていた。

「学べども　学べども　猶わが頭よくならざり　ぢっとカンペを見る」

顧問はその落書きを見て「これは誰が書いたんだ」と訊ねた。部長が「分かりません、先輩だと思います」と答えると教師は「へたくそな字だな」と言ってから、「啄木の本歌取りのつもりか？」と言って「これは本歌取りどころか、盗作にもなってない、単なる語呂合わせだ」と言った。部員たちが緊張して次の言葉を待っていると「いま、職員会議の議題についての資料が配られた。進級判定会議だ」これは部外秘だが、と言って資料を見ながら「他の部と比較して、確率的にお前たち山岳部が断然多くひっかかっている。もう試験は終わっちゃってるから、今更頑張れと言っても仕方ないんだけどな、多分もう一度だけ再試をやると思うから、お前たち今度こそ勉強しとけよ」と言って、帰り際に「あの歌の言葉、お前たちの場合は、学べどもじゃなくて、学ばないからだろう！それからカンニングは絶対ダメだぞ」と捨て台詞のように言って去っていった。

その時部長が「モリチョー（先生のあだ名）がわざわざ部室まで来たんだから、きっと助けてくれるよ」と楽観論を言ってから、「学ばないから　学ばないから　わが頭良くならざり・・・　うめぇことを言うな。おいところで本歌取りってなんだ？？」と聞いた。勿論部員全員再々試を受けなくていい者（それ程頭の良い訳でもなかったが）も含めて、誰ひとりその意味を知る者はいなかった。

黄色い蝶々チロルハットに

ある年の夏山合宿でのこと。わが山岳部がいくら治外法権的自由精神に満ち溢れている部だと言っても、下級生がここで休みましょうなんてことを、進言でできるわけではない。登ったり下りたりの長い稜線歩きが続き、皆がへばってきた時のこと、下級生のひとりがくぐもった声で、御詠歌のように歌を唸った。

♪　赤い蝶々　黄色い蝶々　チロルハットに止まるよ
蝶々さんは優しい友達　一緒に登っていこうよ
六根清浄　六根清浄　声を揃えてヤッホー
蝶々さんは僕らの友達　一緒に登っていこうよ　♪
（旋律の原曲は、オーストラリア愛国歌ウォルシング・マチルダ）

すると別の下級生が歌に続けて、精一杯のやるせない声で皆に聞こえるように

「ア～ア～ッ　赤と黄色の蝶々さんが、上になったり下になったり、蝶々さんはいいなぁ～」とまるで歌の合いの手のような語りを入れた。その台詞が聞こえたのか、聞こえなかったのか、その時チーフリーダーが「よし、ここらで一本立てるか（休憩にするか）」と休憩宣言をした。その号令一下部員たちは一斉に、稜線上の緩い斜面に、肩ひもを肩から外さずに、そのままザックと一緒に体ごと地面に倒れ込んだ。そしてそのザックを背凭れと枕にして足を広げて延ばし、やっとひと時の休息時間を獲得した。目の前には、紺碧の夏空が深く大きく広がっている。そんな雲一つない空に、突然木曽谷からひんやりとした風が音もなく、まるで川が流れるように薄くて白い雲を乗せて、地を這うようにして吹き上げてきた。すると一瞬のうちに目の前の空に紗がかかり、雲を透かして見えた紺碧の空は、柔らかな青となり不思議な空間を作り出した。私は爽快な気持ちになった。仰向けで空を仰いでいたみんなが、無意識に空に向かって両手を挙げて、流れる白い雲を掴もうとするかのように、手のひらを開いて、指に絡みつく雲を遣り過ごしていた。雲は稜線を越えるとやっぱり地を這うようにして、反対側の伊那谷に向かってサアーッと流れ下って行った。チーフリーダーの「さあ行くぞ」という掛け声で部員たちは、またじりじりと陽が差す雲一つない空の下を、次の頂へ向かって黙々と歩き出した。峰々を行く稜線はまだ続く、今夜のテント場はまだまだ遠い。

東北ブナ紀行　最終回に寄せて

奥田　博

『東北ブナ紀行』がスタートしたのは 1999 年 12 月発行の会報でした。以来 23 年間、私が出会った山で自生するブナの森やブナの木を毎回２山紹介し、前回で 134 山に達しました。途中、原発事故で「大震災が教えてくれたもの」と題して自分が線量計を下げて、原発に近い山々を歩いたレポを交えて、数年間「ブナ紀行」は中断しました。黙っていられない想いを書きましたが、会報の発行がはばかれる様な出来事・事態でした。

高山のスキー場開発がストップされ、さらに森林生態系保護地域に、高山がゾーニングされたタイミングで解散しても良かった「高山の原生林を守る会」。しかし、このタイミングで開発を止める自然保護団体から、吾妻連峰・高山周辺の観察会を中心に軸足を大きく変えました。観察会は知的欲求を満たす面白さがありますが、そこには指導者が必要です。そして一緒に悩み喜びを共有できる仲間の存在も大きい。そんな環境が「高山の原生林を守る会」には揃っていました。良き指導者と仲間、この奇跡的な巡り合わせに感謝です。

さてこの「東北ブナ紀行」、青森から南下して東北５県を終え、福島県に入ることになる。福島県はブナの伐採地やブナの森がスキー場にとって代わった場所も多いが、ブナの森も多く残る。地元の県であり、多くのブナの山々が点在しているので皆さまでブナを楽しんで頂きたい。長い間のご愛読、ありがとうございました。

世の中にはブナ好きが多くいます。広島県在住の坪田和人さんは「ブナの山旅」という本で、北海道から九州までブナの森を紹介しています。彼は只見町のブナと関りを持ち続けていました。「ブナ百名山」と名付けてブナを探す登山をアップしている方もおります。

国界（只見町と金山町）のブナと呼ばれた、かつての大ブナ

私もブナには良い思い出ばかりです。ブナを探しに南ドイツやオーストラリア・タスマニアやニュージーランドを歩きましたが、日本のブナが一番のように思えます。

只見町はブナで町興ししている様子で「只見ブナセンター」を作ったことからもうかがえます。「癒しの森」と呼ばれるブナの散策路はブナの森を味わえる。そこに立派な「国界の大ブナ」と呼ばれる大木があった。スッキリとし真っ直ぐ伸びるブナでしたが、それが倒れてしまい、その往生した姿・倒木が見られる。全身コケやキノコや落葉に覆われ、次第に容積が少なくなっている様子が分かる。

倒木となって 10 年以上を経過して容積は次第に小さくなっているのが分かる。こうしてやがて土に還る。

朝ドラで一躍有名になった牧野富太郎。多くの植物を発見した偉業は永遠に不滅です。彼の遺した言葉も素晴らしい。

植物は面白い
一つとして同じものは無い
人も植物も懸命に生きている
あらゆる命には限りがある
出会いそのものが奇蹟
いとおしくて仕方がない

吾妻・安達太良花紀行 94

佐藤　守

テンニンソウ（*Leucosceptrum japonicum* シソ科テンニンソウ属）

吾妻・安達太良連峰のミズナラ林からブナ林の沢沿いや湿り気のある草地に植生する大型多年草。日本固有種。地下茎で繁殖するためか、大きな群落を形成し、急傾斜地でも群落がみられる。一方、沢沿いに群落を形成するヤグルマソウやウワバミソウと比較して、テンニンソウの分布はコロニー状で適正地が限られるようである。

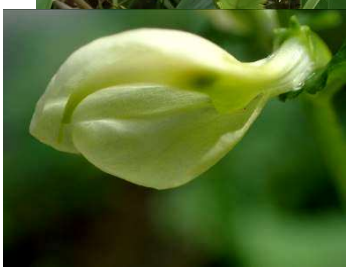
シソ科植物のためか、テンニンソウは温暖化により北上が問題となっているニホンジカの不嗜好性植物である。このことからニホンシカの生息地では群落が拡大するかもしれない一方で訪花昆虫の多い植物であることが知られている。

葉は対生。茎はシソ科に共通する四角。葉の先端はとがり、基部はくさび形。縁に鋸歯がある。葉脈は側脈が葉縁に沿って走る。個体により、葉裏の中脈に開出毛と星状毛が見られる。

花は頂生。枝の先に大型の穂状花序を形成する。小花は合弁花で花茎の基部から先に向かって開花する。小花の色は黄緑白色、苞の先端は尾状にとがり赤味を帯びる。苞は、花が開くと脱落する。花は唇形花で花序に密につく。萼は短い淡緑色の筒状で 5 裂する。花冠は長い筒状で、上唇は 2 裂、下唇は 3 裂する。下方 2 個が長い雄蕊が 4 個、柱頭が 2 裂する雌蕊が 1 個あり、ともに花外に長く突き出る。

ヤマハッカやカメバヒキオコシ、ナギナタコウジュ等のシソ科の植物は花の色や形が艶やかで人の目を引きやすいのに比べて、テンニンソウは風景に溶け込んでしまいがちな色合いで大ぶりの花の割には見過ごされてしまいそうである。しかし、私にとっては、30 年以上前に奥土湯でブラシのような花を見てから気になっている花である。変わり者が好きな性分のせいかもしれない。開花前の蕾が並んだ姿も開花後の雄しべと雌しべが花冠から揃って突き出た姿も面白いと思う。

エゾシオガマ（*Pedicularis yezoensis*　ハマウツボ科シオガマギク属）



吾妻・安達太良連峰の亜高山針葉樹林や湿原周辺のやや湿った草地に植生する多年草。同属のシオガマギクと同様にイネ科植物などの根の木部に寄生根を侵入させる半寄生植物。エゾシオガマは吾妻・安達太良両山域に植生するが、同じ仲間のシオガマギクは吾妻山系には植生しない。エゾシオガマの方がシオガマギクより植生域の標高が高いようである。また、シオガマギクより、エゾシオガマの方が一箇所の個体数が多いように見える。これは、エゾシオガマは株立ちするのに対しシオガマギクは 1 本立ちしていることに関係しているかも知れない。

葉は下部から上部に向かって対生から互生に変化する。枝の先端で節間は詰まり輪生状になる。短い葉柄を持ち、葉の形は細長い三角形で、基部は切形。葉縁には重鋸歯がある。

花は、腋性。葉腋に黄緑白色の 2 唇弁花を着生する。ガクは先が斜めに切れた筒形で腹面は深く裂け、上端には 2-3 個の小さな鋸歯がある。背面はとがって先は 2 浅裂する。花は基部からねじれて反転する。上唇は細長く嘴状にとがり、基部から先端に行くにしたがってクリーム色から緑に変化する。先端は湾曲し、鳥の嘴状になり、その先から緑がかった球状の柱頭が覗く。下唇は 3 裂し、中裂片が小さい。花弁には白毛が着生する。雄しべは 4 本で上唇の中にあるため見えない。2 本が長い。

私にとって、エゾシオガマは季節の変わり目を知らせてくれる花。山でエゾシオガマの花に出会うと、夏の終わりを感じるのである。緑がかったクリーム色の花の色合いが疲れた体を落ち着かせてくれる。ただ、シオガマギクと同様に不思議な花でもある。花の形もそうであるが何より雄しべが嘴状の花の中に納まったままでどのようにして交配をしているのか、最大の疑問である。葯が上唇から突き出ているのを見たことが無い。

第 190 回自然観察会案内：雄子沢ブナ林・紅葉のブナ林観察会

日時：2023 年 10 月 29 日（日）7：00～16：00
（雄子沢登山口駐車場が混むことが予想されますので集合時間を早めます）
集合場所　四季の里正面入り口（あづま橋側）
集合時間　7:00　参加定員　20 名
内容　雄子沢を経由して雄国沼に至るブナ林を散策し、秋の花々と高原の広葉樹類の紅葉を観察します。
準備するもの　昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳
＊装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。
参加費用：保険代（500 円）、申し込み：10 月 26 日(金)まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後 7 時～9 時でお願いします）。

第 191 回自然観察会案内：水林公園・初冬の川辺林観察会と総会

日時：2023 年 11 月 26 日（日）
観察会 8：30～12：00　総会 13：00～16：30（会場：福島市西学習センター研修室）
今回の総会では会運営の大幅な変更に関して協議します。多くの会員の方のご参加をお願いします
集合場所　四季の里正面入り口（あづま橋側）
集合時間　8:30　参加定員　20 名
内容　水林公園とその周辺の川辺林の林床植物や樹皮、冬芽を観察します。
準備するもの　昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳
＊装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。
参加費用：保険代（500 円）、申し込み：8 月 4 日(金)まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後 7 時～9 時でお願いします）。

ボランティア作業に係るロープウエイ・リフト代を支援していただける方を求めています。ご協力いただける方は下記に振込をお願いします（通信欄に「ボランティア資金」と記載をお願いします）
郵便振替：02170－0－24351「高山の原生林を守る会」へ

振込による会費の納入は、郵便振替０２１７０－０－２４３５１「高山の原生林を守る会」へ

もりびとノート：　自然に優しくない自然エネルギー発電

「山地の大規模太陽光発電施設の設置をこれ以上望まないことをここに宣言する。設置計画には市民と連携し、実現しないよう強く働きかけていく」福島市長が「太陽光メガソーラいらない」宣言をした。先達山の 60ha に及ぶ森林伐採をして進められている太陽光発電設置工事により緑の山の斜面に大きな裸地斜面が出現したことに危機感を覚えたらしい。これに対し、事業者はすぐに黒いパネルで覆われるから景観は気にならなくなるとコメント。地元ではクマやサルの山下りを心配している。実は、地元への説明会で、景観や、豪雨による斜面崩壊、野生動物の山下りなどは住民から指摘されていたこと。炭素の収支が火力発電と比較して太陽光発電が勝るとの計算式を示して森林伐採を合理化していたが・・・。もりびとは果樹園への影響を指摘したら、地元への経済効果をうたう推進側の人に罵倒されたっけ。農業は経済行為の範疇には入らないようだ。

一方で、吾妻と茂庭山系の絶滅危惧種イヌワシの生息域で風力発電の設置計画がいつの間にか進められている。これって本当に自然に優しい発電なのだろうか

「高山」高山の原生林を守る会会報　第126号　2023年10月発行
編集・発行 ： 高山の原生林を守る会　HP:http://adumatakayama.justhpbs.jp/index.htm
（URL が変わりました）
代表連絡先 ： 佐藤　守　Phone　024－593－0188（夜間7時～9時）
郵便振替 ： 02170－0－24351　「高山の原生林を守る会」
入会方法 ： 年会費（1000円）を添えて上記まで
編　集 ：佐藤・奥田